



## 岩瀬キャンパス／中等部・高等部

### 新築工事の中間報告

仕事の種類に拘わらず、全ての職種が何らかコロナウイルスの影響を受けているわけで、御多分に洩れず、岩瀬キャンパス新校舎の建築工事も、4月、5月の緊急事態宣言等の影響によって工事の進捗にやや遅れが生じておりました。もっとも、その頃より設計・施工の責任者の方々からは、「若干作業が遅れざるを得ませんが、竣工時までには予定通りのペースを十分取り戻せますから」とおっしゃって頂いていたものですから、全く心配はしていませんでしたが。果して、工事関係者の皆さんのご努力によって、コロナ禍の中とはいえ、9月末日をもって、当初の「工事進捗表」通りの対完成時35.6%の水準を回復して下さいました。

総合グラウンドから東方を眺めると、中庭を囲んだ、建築面積3973.25㎡、延床面積11301.66㎡のコの字型の新校舎を右手に見ながら、常緑樹の立ち木の向こうに、現在の初等部と本館を望むことが出来ます。躯体は、10月末で4階の床面までが建ち上がり、12月中旬までには屋上の床面も張られる予定です。

私の岩瀬キャンパス総合グラウンドの原風景は、ちょうど今時分の季節でしたでしょうか、ある週末の夕方、誰もいなくなった総合グラウンドにタスという名前のシェパードを楽しそうに走らせている松本尚先生の姿をボーッと眺めていた情景です。秋の夕靄の中、国旗掲揚塔の前に、朝礼台がポツンと置かれておりました。

かつての名立たる私学のリーダーは、むしろキャンパス内に居を構え、24時間を教育に勤しむ生活でした。松本邸は、鎌倉女子大学前交差点脇の、今では工事車両用の搬入口内の軽い傾斜地に面した場所にありましたが、これといった設えもない狭い庭から1mばかりの段差を降りると、記念学舎の脇の芝生に出られ、先生は、休みの日には、そこから愛犬を連れだすわけです。ゴルフをするわけでもない、お酒を飲むわけでもない、趣味らしい趣味もお持ちでなく、「学園こそわが命」を座右の銘に生涯を費やされた先生の唯一の息抜きが、犬と戯れることでした。

今回のキャンパス整備は、考えた末に、全学部の将来の関係性を見据えながら、善かれと信じて実行したことでありますが、大きな判断をする折に、私は、尚先生が今の学校の姿をご覧になったら何とおっしゃるのか思い浮かべることがあります。喜んで下さるのか…、自分が求めていたのは、そんな学園ではなかったとおっしゃるのか…。

11月19日、モデルルームが整ったということで、工事管理者の戸塚祐造氏やプリンシ

パル・アーキテクトの林寛三郎氏の案内で、完成時近くに設えられた教室を見学させていただきました。他は、未だ配線・配管が露出した、打ちっぱなしのコンクリートですが、はっきりと景観は整い、1階の職員室、2階のラーニングコモンズ、3階、4階の図書館と、階上に昇るに従って、ますます富士山が姿を現す本当に素晴らしいパノラマです。この夏から、この校舎を生徒達はどのように活用するのでしょうか。

「中学校・高等学校の校舎としては大変な規模ですよ。これだけの工事をするには、資材の全てを調達してから始めるもので、既に洗面台やトイレまで万端整えてあるのでご安心下さい。でも、工事の着工がもう半年遅かったら、コロナの煽りを受けて、海外からの資材も輸入出来ず、工期の大幅な延期を余儀なくされていました。本当にギリギリのタイミングでした」とは、長らく大型建築に携わった経験のある林施設管理部長の話です。

感染症の世界規模の拡散などということは、誰もが想像もしていなかったこと。大船キャンパスを建設する時にもつくづく感じたことですが、大きな仕事であればあるだけ、1人、2人の努力で出来るわけもなく、また人だけではなく、本当に人知を超えた天の配剤としかいいようのない、正に人・物・時が全て結集しなければ、とても成就し得るものではないことをあらためて実感します。史家ランケは、「各時代は神に直接する<sup>\*</sup>」といましたが、宗教家でなくとも、あらゆる仕事に神に直接する瞬間があるものと思います。

※ランケ著『世界史概観 一近世史の諸時代』鈴木成高・相原信作訳 岩波書店

[>前のページへ戻る](#)